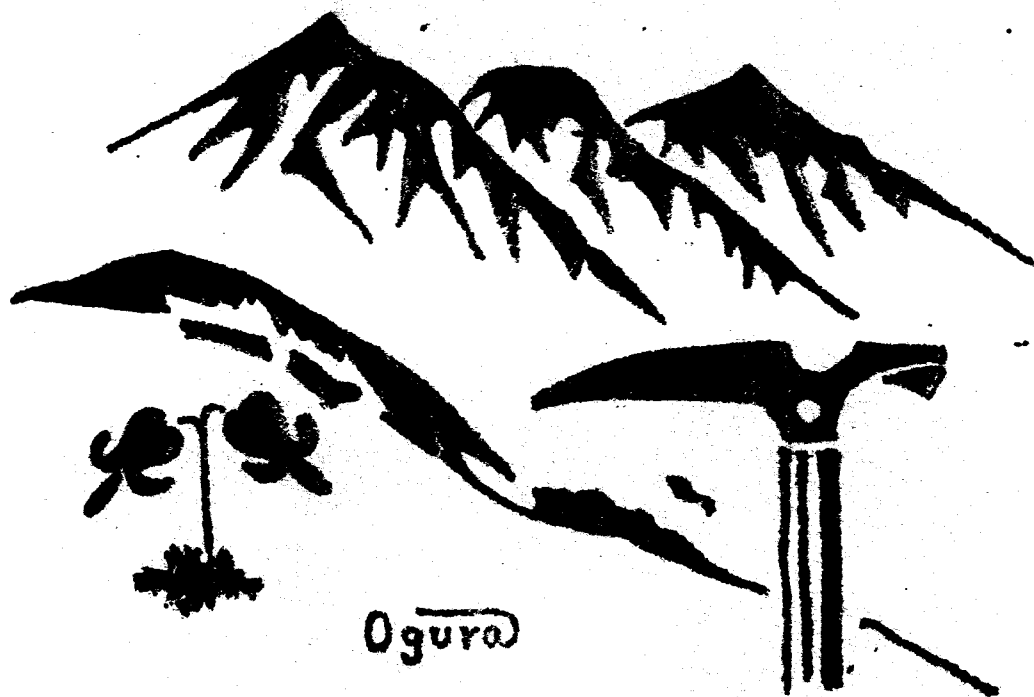


こぶし

第五号



上越こぶし山の会

もくじ

2 労山新浮鼻連盟の再建をめざして

8 越後駒ヶ岳

9 残雪の妙高山

10 山のできごと

11 妙高山北地獄谷へ右俣

12 山

13 (急ヶ岳コース)火打・焼山登山

14 八海山三度目の挑戦

15 裏金山谷

16 剣岳敷北山行

18 妙高清澤登山

19 後立山全山縦走

25 白馬・唐松縦走

27 穂ヶ岳集雪中登山

38 不思議な経験

39 全国登山祭典に参加して

42 妙高清澤登山

44 新会員の自己紹介コーナー

〈編集後記〉

労山新厚県連盟の再建をめぐりて

上越こぶし山の会

一昨年六月に才四回總會を閉じて以來、不正常な活動が絶えていた労山新厚県連盟は、ようやく去る2月16日に各会代表者會議を開催し、再建にむけて、その第一歩を踏み出した。

會議では、加盟各会から現状と再建へむけての様々な意見が出された。そして、来たる4月13日に小出で才5回總會（再建總會）を閉くこと、それまでの間の臨時執行部として5名よりなる「再建準備委員会」が選出され、また3月21日と23日に妙高山で「冬山技術講習会」と行なうこと等が決められた。以下に掲げる文書は、代議者會議に付して、上越こぶし山の会が提起したものである。会費各位の積極的の意思を歓迎する。（尚、当日は、妙高山の「冬山技術講習会」も提案したが、こぶし山の都合上、カットする。）

新しい県連を創るために

上越こぶし山の会

一 登山運動の原点

日本労働者山岳連盟は、その発足にあたって、既存の山岳会の存り方、運動、運営を批判的に分析し、労働者の登山要求を小まえて、登山運動の原則を明らかにしました。それは、「働く者の立場に立って」、「安く、安全に、楽しく」登山し、「自主的、自覚的、民主的活動」を展開し、「自然保護運動」と取り組むこと等であり、既存の山岳会にはない全く新しい特色でした。

緑の旗をかかげた登山は、当初ハイキンス等が主だったところから、若登り、冬山、海外登山も取組むところまで前進してきております。技術的向上と組織的拡大が両輪となり、民主的運営——仲間を大切にした活動が原動力となつて、今日の登山ができたのでしょう。

新しい新浮巢連盟の発足のために、技術的にも、組織的

にも、理論的にも、様々な面で、発展した登山運動の今日の創発点から多くのものを学ばねばならないと同時に、趣意書に述べられている登山運動の原点と今日の新浮巢の登山運動に正しく生かしていかなければなりません。

二 重要な県連の役割

登山運動の発展にとって、全口連盟や単位山岳会の役割が重要であることは明らかです。同時に、地方連盟がその力を発揮した所では飛躍的に発展していることも明らかです。新しい県連のために、その役割を明確にすることは大切です。

全口連盟が全口の登山のセンターであるように、県連は新浮巢の登山のセンターでなければなりません。個々の登山は、それぞれの地域で活発な活動を行なっています。この活動の情報を集め、各加盟登山に普及していくことは、運動の発展にとって欠かせないものです。

「仲間を大切にすること」といふかえれば、「連帯と団結」ということですが、県連はまさにその「カナメ」の組織で

す。北信越の冬山研修会に参加した人達は、他県の友達
の和気相々とした奮意風と、新井集の「名まえも頼むわか
らない」状態を比べて、おどろいていることでしょう。他
県では単位山岳会が孤立しているのではなく、県連が一つ
の組織として、一体となって発展してきています。県
連はそういう活動のセンターでなければなりません。

北信越の冬山研修会では、多くのものを学びました。

また、友々の「技術」なるものが、いかにおくられているか
研究がたりないかも知られました。伯々の会では、それ
をいかに良いものを持ち研究しているのでしょうか。しかし、
交流がないため、学び合い、研究し合い、良いものを創っ
ていくことができません。「井」の中のカワズ」になっているので
す。県連はこれを組織的に保障すべきでしょう。

登山は、「働く者の立場に立った登山運動」を進めてい
ます。これには「働く者の立場とは何か」「県内の働く人
々のおかれた状態はどうか」など様々な解明しなければなら
ない問題を念んでいます。伯々の会でもそれは研究し深
めることができるでしょうが、県連が中心になって進める

ところにいっそうの発展があると思われいます。

単位登山は、日常的に登山をし、実践を主とした組織で
す。県連はそういうに各会の活動をほぐし、援助し、指導
する指導部です。この役割のちがいを明らかにし、役割に
よって活動のやり方が求められています。交流会、講習会
研修会等の企画と運営は、こうした活動の重要な内容とな
ることでしょう。

県連の役割はまだあると思いますが、新しい県連を作る
上で必要は諸点にかきつて述べました。

三、今までの県連の問題点

古い県連についてはオナーに指摘しなければならぬこ
とは、指導部としての責任の問題です。県連をここまです
い込んでしまつた責任を回避しては、県連に対する各会の
信頼を得ることはできませんでしょう。

古い県連の問題点を容直に出し合い、検討することは、
新しい県連の発足にとって大切なことです。

県連が今日の状態に陥らしたオナーの原因は、責任を

労働者の間全く崩かかっていることでは、その上昨六月に崩かかればならぬ念も打たれておりません。これでは指導部としての役割をはたせないのはあたりまえです。それは、~~崩れ~~崩れずから決めたことを実行しようという態度です。労働運動の根本と理解していかないといわれても仕方がないでしょう。

このことはまた、果連監規約に対する態度の問題でもあります。規約を身とすること、組織活動のイロハではないでしょうか。

オニの原因として考えられるのは、^地城がないということ、果内を三プロックに別けたことです。果連の力量、各会の力量が強大であれば可能かも知れません。その場合でも果連——プロック——会の関係が明確になっていることが前提です。それなしのプロック制は、果連をバラバラにし解体することになるでしょう。果連は一つにまとまっていってこそ力を発揮できるのです。

このプロック制は、果連崩れからの指導責任と放棄したということでもあります。プロック体制に必要な体制と

らす単位山岳会にすべてを押しつけたのですから。

問題点のオニは、事務局体制と連絡体制です。これが、個人まかせになっており、組織的になっていないか。たことは、その人に事故のあった場合、応急の体制をとらなければならない。

政治的保障がないということは、非常に大きな問題点です。これは「活動しない」ということを堂々しているに等しいことです。全口連盟費の未納と合せ、重大な問題点として指摘されるはなりません。

四、新しい果連をどう創っていくか

——われわれの提案——

「果連活動は再開するのではなく、再建されるべきではない」という意見にわれわれも賛成です。しかし「再建しなければ、活動を再開しても意味をもたない」という意見には賛成できません。現状では「再建する」というよりは、むしろ「新しく果連を創ること」の方がよいでしょう。ただ、全く新しく創るのではなく、「古い果連が存在

する」ということが、結果の場合とちがうところですが、従って「新しく創る」のです。そのために「古い異連」を積極的に利用していくことが必要です。

異連盟総政の第一歩は、異連単位労働の交流から始まります。企業の間連の智慧を集め、相互の理解と親睦を深める活動と一つ一つ積みあげることによってこそ、異連の必要性が理解され、新しい異連の具体像が浮かびあがってくるでしょう。「古い異連」はそのために奮闘すべきです。

「新しい異連」は、そのほとんどは組織でなければなりません。われわれは次のように提案します。

組織として、運動体としての異連を創るためには、事務局体制と連絡体制を確立しなければなりません。それには、事務局担当労働を決め、組織として取り組めるようにしなければなりません。

指導部としての異連は、必要は組織と機構を設け、常任委員会等の会議は定期化する必要がある。異連盟は一つの組織として、統一した指導のもとに活動することが望ましく、アロックス制は現段階では採用すべきではありません。

ん。

異連は、企画団体でもありますから、交流会、講習会、研修会等を積極的に企画し、運営し、加盟労働の交流と親睦をはかり、技術と理論の向上につとめなければなりません。

異連が諸活動を行なっていく上で、政的保障と作ることとは重要な意味をもちています。一加盟労働月額千円位は必要でしょう。もちろん独自に取立を確保する諸活動も行わなければなりません。

五、当面の諸活動

「新しい異連」の創造のために、われわれはすぐにも活動を開始しなければなりません。

1. 全口代表者会議に代表を送り、全口の仲間の活動状況を知り、異連創りに生かしていく。

2. 北信越アロックスとの連絡を強め、当面3月1〜2日の経歴交流集会に参加する。

3. 全口連盟費を納入する。新定予算と組み、50年1月度

分よりの県選盟費を徴収する。

各会の現状と把握し、ニュースを発行する。そのため
の体制をつくる。

北信越スロツク冬山技術研修会の成果をまかせ、県連
の技術講習会をひらく。

以上

掲 示 板

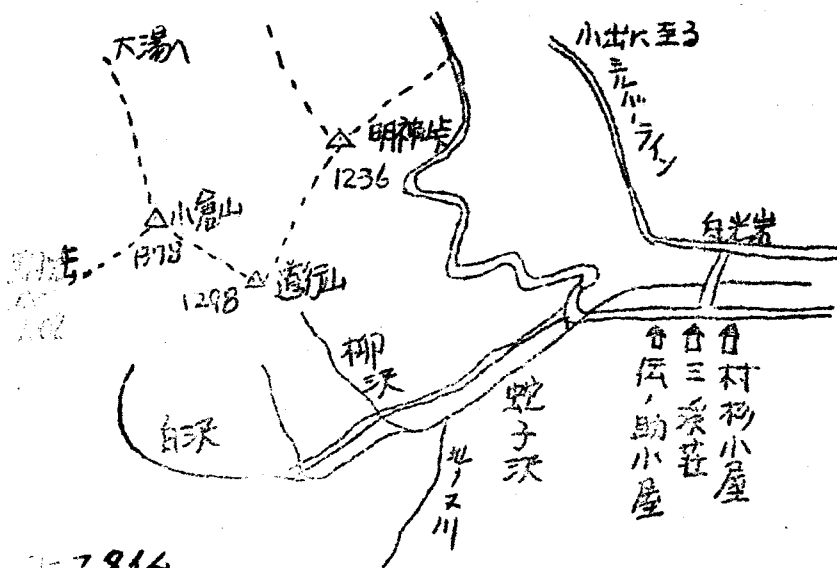
- 県連再建準備委員会が発足し、3月21日～23日に妙高山
で冬山技術講習会を行ないます。(上越こぶし山の会が主管)
- 4月13日(日)に、小出町小出郷福祉センターで、第5回
新潟県連総会(再建総会)が開かれます。
- 5月連休合宿が企画しております。参加できる日程
とは、きりさせていただきます。

越後駒ヶ岳

嶋田五郎

四月に予定した登山だったが春解と重なり五月十八日となる。小出から職場の仲間三人とシルバラインを通って銀山平へと向う。そこはまだ道の側には2米程の残雪。伝ノ助の近くで昼食をすませて今日の幕営地白沢出合に向けて出発。天候は五月半ばと言え豊富な残雪で山が美しく、漸く芽生え下標の新緑が残雪に映えて一層山を引き立てる。地ノ又川でいに進み、蛇子沢から右に道をとり15時頃白沢出合に到着。幕営する。19日6時30分頃出発。ユースは、柳沢と白沢の中間で天をとり道行山に出てその稜線から小倉山を経て駒ヶ岳山頂には、10時50分頃到着。食事をしながら残雪に色どられた上越の山々を展望。12時過ぎ山頂を後にしてグリセード、尻セードしながら下り、小倉・道行の山頂では、お分に時間どおりかッシリ残雪で埋まっている柳沢を一度に下り幕営地に15時頃着く。

三日目の20日はゆっくりとし、近くの登でグリセードしたりして遊び8時15分帰路に着く。往路と同じコースをたどり9時30分銀山平に着く。三日間天候に恵まれ、のんびりと残雪の山を歩んだ山行だった。



- 814
 小出 (10.33) 伝ノ助小屋 (11.30, 13.30) 白沢出合 (15.00)
 白沢出合 (6.30) 道行山 (7.50, 8.10) 小倉山 (8.40, 9.00)
 百草池 (9.25) 駒ヶ岳山頂 (10.25, 10.35)
 駒ヶ岳山頂 (10.50, 12.00) 小倉山 (12.40, 13.35)
 道行山 (14.00, 14.30) 白沢出合 (15.00)

残雪の妙高山

小倉 泰治

時 549 下

単独

朝目覚し時計のベルの音でとび起き窓を
開けて見ると太陽がまぶしい。よし今日は
行くぞ。朝食をすませて必要の物をサッ
クにつめ込み、ビッケルを持って駅へ。ホー
ムにあるとや二どめがすらい人に会う。

「よう、しばらく元気だね」と声をかけて
きた。その人は中堂時代に小生の担任の先
生であった。七時の七分の列車に一語に乗
り車中いろいろと話しがとび出した。小生
にとつて又先生から何を習ったか山へ登つて
いることに初めて知り気分の通じることと
感じたのがあった。新井が別れる時「小倉、
気をつけて山の会の会費を忘れよと云つてくれ
た」。さて妙高山原駅に下り立ち取前より池
のまわりの心算に乗り込んだのが客は小生一人
何とも云えなかり気分だった。終末では10数
名が居た。前方に陽がまぶしいくわい、残雪
が輝き出している。妙高山の風景を自ら躍動

感を覚えてきた。しかしその気分もいつしか
温か消えり、ラスト終点より墾地のむじり、雪が
とどろく。屋根には雪が積りつてしまった。南地、燐谷
を過ぎて大谷ヒュッテへ。雪がけ水がヒュッテ
迄の山道を沢の標にフクリ重えていた。三三
でろ人のパーラーに会い、茶を一杯もらう。ヒ
ュッテ付道には以然、鏡面がありこれに照せば
光を想像まで直登せしめて屋敷と休憩をする。

さて三三から麓根を直道かうりに行く。まだ
二の道は白い雪の下である。鏡面を登るのに
大変な苦難だった。岩全面が雪氷でおおわれ
ていたからだった。下山はこの斜面を滑り降
りるのが楽しかおと思いはながら山頂へ到着。
誰も居なくすべてが静寂であり世界には自分
一人の物の様に感じられた。フト湧き立つ自
己に自分らの存在を示してくれようとした。
軽い雪を被いよいよ下山、鏡面に降った雪の鏡
面の斜面を一機にグリセードで下る。本道は
恐ろしかったのか？ 鏡は全てが暗闇であり
又快調であった。グリセードの食料を所は可
べてそれだけで下り、あのクラリ、若しかつた登りが

妙高山・北地獄谷右沢

4968

杉本敏宏

卑のすいた国道を軽快に走り、赤倉温泉を径て燕温泉へ。温泉衝のすぐ下まで卑を乗付け、タイヤに石をカッて出発。その間にも何人かの登山者が行く。

温泉小屋で水を補給し、称名滝でキツ。地獄谷に入ると、雪の上を渡ってきた冷たい風が心地良い。前方を行く2人の登山者をゆっくりと追抜き、胸突八丁入口をすぎ、ずつと沢をつめる。

つぎあたりは3本の沢の合流点だ。左沢は鎖場下へ、中央沢は南峰カールへ、そして右沢は北峰へとつきあげる。

右沢は入るとすぐ20米位の滝がある。これを左側から巻いて上る。オラオラだ。若石注意。雪渓は巾20〜30米位、この辺りの傾斜は40度位か。陽があった。しているが、所々凍っている。鎖場とほぼ同じ位の高度の所で休息。右手に北峰の岩壁がみえる。思っ反ほど大きくはなく、面白そうでもない

。取付はこの辺りか。この辺から斜面はますます急になり、一步一步が慎重になる。もう少し楽いとアイゼンが心霊かも知れない。

やがて雪渓は終り、草付とドロとカシ。そして大きな岩が積み重なった岩場。石垣を登っているようで難かしくはない。踏跡も何もないので、どこでも良いから上へ上へと登るしかない。したいに樹木が多くなり、タケカシの太木が行手をささえざる。岩をよじり、木を登り、しかし高度が増すに従い樹相はナナカマド、ミヤマハンノキに変わり樹高も低くなる。

大きな岩をつたって左手に折れて途と北峰の頂上だ。妙高山でたて一ヶ所のハイマツがあり、ミネザワラカレンの花を風に小るわせている。昼食をとりながら火打方面を一望。南峰に登り、しばし昼寝。その気持の良いこと。

鎖場までは稜道を下り、そこから左沢をクリセードで下る。陽のあたりをいうすぐらい沢だ。右上からにぎやかな声も聞こえる。天

狗堂か光善寺池だろう。

地獄谷に出て、途中左手の沢でたくさん
のネドを取った。ザック一杯になり、登り
よりも重い。

蒸温泉の共同浴場はまだ湯が入っていない
か。まだ明るいうちに高田に着いた。

コースタイム

高田(6:30)〜蒸温泉(7:30)〜8:00)〜温泉小屋
(8:40)〜出合い(9:20)〜北峰(11:00)〜
南峰(11:30) 13:00)〜鎖場(13:10)〜出合い
(13:30)〜蒸温泉(14:30)〜高田(15:30)

山

芳沢喜久男

山を登りながら、
なせこんなにつか水なのに
のぼるだろう。

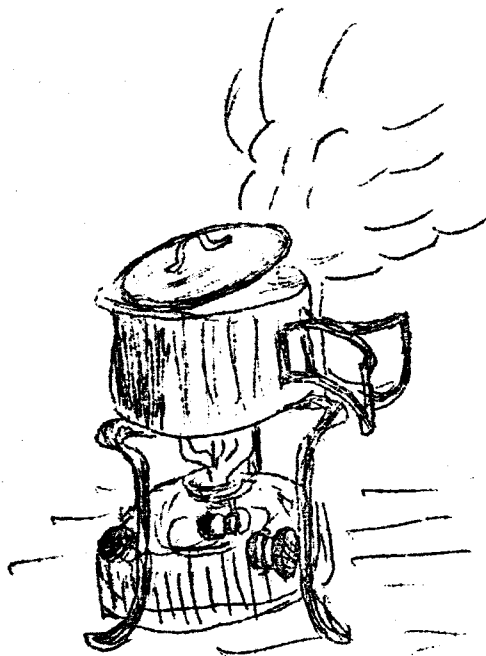
つか水でくちとぶと

私は考え方のただが、まてよ

私も、まていていく水もライチョウさんよ
早くあなたに

あいたいよ。

あつてあなたに「ゴンニチワ」といいたいよ。
そついう気持ちでいっも山にのぼるー私



鬼ヶ城コース火打・焼山登山

嶋田五郎

期日：昭和十九年六月八日（九日）

パーティ：嶋田他三名

職場の友人三名と直江津駅六時五十六分
必に乗車、新井駅下車、車で赤三電所
に向う。赤電所手前で下車して仕度を整え今
日の宿泊地高谷池に向けて歩き出したのは
八時二十分近く。

天候は快晴、しばらく登り一時間近く歩
いた所の竹藪で夕食用の竹筍を取る。

シバク口沢をたどる頃から竹は開花の盛り
で、藪こぎの度に黒い花粉が散り、息も出
来なりました。

能小屋跡から濁り俣川に出る。そこから
雪溪の上に出るまでの約一時間は濁り俣川
のへつりを歩いたり右岸左岸を高まきした
りの連続だった。

雪溪に出た所で昼食。約二時間で三段の
滝に出る。滝は殆ど雪に埋って所々口を南
けている。滝を過ぎたところから上の平に

向けて急な登りをつめて最短距離を取り天狗
の底の上へ出る

藪こぎして天狗の底へ出て高谷池に着いたの
は十六時三十分。高谷池も雪に埋もれたまゝ。

九日モ快晴となる。四時起床、朝食をすま
して高谷池を五時三十分出発。火打山頂まで
殆ど雪の上。火打山頂で雷鳥に出会う。

山頂は一休みして焼山に向う。胴抜け切戸を
過ぎて焼山々頂迄は残雪がびっしりだった。

山頂からは積城の山々を眺め、遂く後立山
を望む。下りは泊岩から残雪を踏み、てりる
木無谷を下り、利次から夏道に出て展望台に
出たのは十一時三十分。

昼食をゆくり食べて昼食に向う。途中思
ったよりも残雪多く時々道を踏み違えて笠倉
まで時間を食って十五時十分頃着く。一風呂
浴びてバスにて帰る。

八海山三度目の挑戦

池田洋子

期日—S四十九年六月十五、十六日

参加者—上桑原 徹 木島忠彦

小倉泰治 小林靖夫

田中 進 芳沢喜久男

池田洋子 木沢久美子

以前居たことのある小千谷小学校の校歌に八海山が歌われており、どんな山なんだろう、いつか登ってみたいと思っ、ていたところ機会を得る事が出来ました。

私が山登りを始めたばかりの頃、東京の山岳会に所属していた時のことでした。

たしか六月の末に夜行日帰りで沢登りをや、たのが初めてでした。

沢にはまだ雪がたくさん残、ており、沢の寒しさやスリルを味わ、たのもこの時でした。地図を見てみますと、これは高倉沢ではな、りかと思、いますか？…。

二度目は五月の連休でとてもお天気が良く

喉の乾きがひどく、水が飲みたくなって仕方ありませんでした。雪焼で爽々としたもので、二の時を峰々には雪がついており、危険を感じながらもサイルを引、張り上げてもらったのを覚えてります。ハッ峰を越え、入道岳で天幕を張り、あの時の素晴しい夕焼けは今でも脳裏にやきついてります。

三度目はこぶしの仲間と桑原氏宅に一泊させていたおき大倉口から挑戦したのです。

六月十六日の暑い日でした。ところぐに残雪があり涼風を感じたものですが急な登りで尾根に出ると風はち、と吹いてく水ません。汗が滝のように流れてりますが皆は黙々と登っています。私は遅水ながらも頑張、たのですが五合目でついにサウン、一人で下山せざるをえなくなり、フラ、フラしながら八海神社迄。皆の帰りのを待、っていたのでした。体力の限界を感じたものですがリ、ず水又挑戦してみるつもりです。

東叡金山谷での事故について

杉本敏宏

昨年6月30日、東金山から金山に登頂し帰路、グリセードで下降の時、転倒し右脚と骨々折という事故を起し同行者並びに会員の皆さんには大変ご迷惑をかけしました。

この事故は、安全登山の観点からみると、汚えるべき事がいくつもありえます。今後このような事故を起さない為の一助になればと思ひ、振り返ってみたいと思ひます。

一、事故発生の状況

(1) 当日の天候は曇・時々薄陽が射す程度で頂上は凍えそうなお寒さ。残雪が殆く大滝だけが残りのでかせてあり、残り十数ヶ所の滝は雪に埋つていた。そのため、滝の部分は急斜面になつていた。雪の状態は硬く小さなスプリン状。グリセードが快適な下山を保障しているようにみえた。

(2) 上かうろく4番目の滝を下降中に事故が發生。急斜面を急いよく降りた為、雪が飛

散しそれが眼鏡に付着、前方確認ができないうつになりその時、斜面の夕夕深めの凹地に足をとられた時に骨折した。

(3) 事故当時の体調は、6月27日より出張し、29日21時帰つてきたため、疲労が重なつていたものと思われる。

二、事故発生後々々処置

(1) 事故発生後、直ちに本人を安静にし、ソリ作り作業を開始した。付近の樹木を使用。ビヤケルで切断。ザイル、シュリングで固定し立派なソリができた。

(2) 患部は当時の判断ではネンザと思われ下ので湿布薬を貼り雪で冷した。

(3) 本人も竹少歩ける状態なので大滝の所や雪がなくなつてからは所々徒歩。

(4) 通信装置もつていたが使用しなかった。

三、反省と教訓

(1) 直接の原因は、安易な急降でスピードを出しすぎた事である。体調、斜面の状態等を考え、自重すべきであった。

(2) 間接的には、出張から帰つてきたばかりで

体調不十分であつたことである。このよ
うな場合、山行は止めるべきだろう。

(3) 搬送技術、応急処置等の訓練はやつてな
かつたが、一応の処置がとれたことは評価
できる。今後、より確実な方法についての
訓練が必要であらう。

(4) 通信機、ザイル、シュリング等はもつて
いたので良かったが、暗くなつた時ヘッド
ランプがなかった。日帰り山行でも安全を
考えもつて行くべきだろう。

剣岳敗北山行

山崎昭雄

期日 昭和49年6月28日と6月29日

タイム

高田(2.41) 富山(4.23) 立山(6.16) 美奈(7.45)
宝堂(8.35) 雷鳥沢(9.05) 剣御前(11.0)

89

剣御前小屋(8.30) 宝堂(9.05) 美奈(11.30)
立山(12.12) 富山(13.24)

オ一日。ちくしよ。私の単独山行で近頃
天気よかつたためしびない。去年の翌ケ

岳にしてもそうだ。雷鳥沢で雨にうたれ、山
の女神は晝女はいつも私を手荒く歡迎してく
れるのだ。と心の中で思いつつて登つてきた
が全然、剣への意志がゆかない。私の心はも
はや逃げ腰して天候も良くなりそうも無いし
、今日は剣御前小屋に泊つて天候をみせ明日
天気が良ければ登りだめなら、引き返せば
いいと、もう一方の私の心が勝手にきめてし
まったもので私はしようがなく剣御前小屋に
泊ることにした。

オ二日。昨日の夜、小屋の主人との話で
私の単独行に於ける不安、悩みを少しでも和
らいでくれたので、今日の剣岳へ向う登山を
みても少しも心の動揺があらなりました。
また、朝方時頃、剣岳をみた時おんとしま
した。何故なら、ガスによって一瞬朝やけに
輝いたからです。そして、宝堂の遠くの空を
みると、大きな黒いレンズ雲が近づいてあり
ました。7時30分現在、空はまだ大丈夫です。
ガスが時々かゝる程度です。でも何にか曇費
がきているようで不安です。剣より、また

あう日までさようなら。今度こそは、あの頂きに登るぞと思ひながら雷鳥沢を下る。Aの苦しみ

登山にありて、常に自分との闘いでそれに勝つた者が山の頂きえ、敗れた者は引き返すであらう。どはそれでは敗れたがというとならうではない。何故、山は無表情に我々単独行者をみているからではなからうか。山との闘いにおいて敗れたというのは、それは山での死ではなからうか。もしも、何度か山へゆき、そのつど引返してきても常に前向に今度こそあの頂きに登るぞと思ひ、ついに、登頂したそのときこそ自分自身との闘いにおいて勝つたといえるのだらう。しかし、山に勝つたとはいへぬ。山は私個人まで相手にもしてくれない。山はいつもなんにも答えてはくれない。たゞ、且の前さむとひけらの人間がうろついているのを、うさんくさそうにみているだけだ。深悟空が、仏祖の手の中でしか後んどいなかっただよう下。所詮、単独行は自分との闘いだ。

単独行の悩みはみんな同じだ。誰か寂しくていつも帰ろうと自分の中をぐるぐる回して出している心とB A C Kのサインを出している心との闘いなのだ。あの偉大な故加藤文太郎がさえ、彼の山行記録を読むと同じことと告白しているではないか。小屋の主人も同じだと言っているではないか。それに比べたらAよ、なぜ自分だけ強い人間と思ふことがあろうか。単独行を志す者は皆同じだ。それなら、もっとゆつたりとした気持ちで山にいざなうらうか。それにより、より頂きに達することが多くなるのではなからうか？

単独行者よ、常に強くなれ、そうではなければ強い者は虐待され、滅ぼされて行くであらう。強い者は、嫌々強くなり、益々栄えてゆくであらう。といつたのは故・加藤文太郎であるが、身にしみてわかつてきた。

II Aよ、まず自分に勝つて、それが単独行者の第一条件だ。

山よ、私は、貴方の僕です。貴方が時々、お怒りなれば私は、岩壁にそっと身を寄せお怒

りの静まるのを待つでしょう。貴才が私に微笑みたくだされば私は、貴才の下に参るでしょう。時には、貴才が私を慰撫すれば私は、天にも登る覚悟になるでしょう。

あー山よ／＼／＼！！

貴才はなんと偉大なんでしょう。それに比べて私は、なんとはかばり動物なのでしょうか。

山よ、私は、貴才の忠実なる僕です。

妙高清掃登山

八木真理子

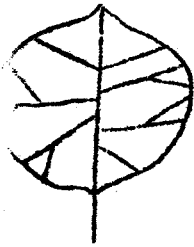
49ウ21 パーティ

木島、小倉、古木

八木

「新潟県山のゴミ会議」主催の妙高連峰清掃登山が七月二十一日、二十二日の両日にわたって妙高、火打を中心に行なわれ、私連四名は二土日の日帰り組に参加致しました。

コースは燕より天狗堂、經由で長助に下りそこで日帰り組は(引名)帰り一泊組は(引名)火打に登りゴミ拾いをしました。二十日の日は朝からお天気が良く、雨具も持たず、おにぎりだけ一ツのリュックにまとめ、片手に配布されたビニール袋を持って出掛けました。清掃登山は始めてで何も考えず、何も持たずに出掛けると、ひとつのゴミを小さく持って手でわざわざ拾うのでとてもおっくつで、バタマンの棒があったら……としきりに思いました。ゴミは思っていたよりもずいっと多く、同じ人間として情けなくなる程でした。自分一人位が多過ぎるのです。空カンのほと



んどが木のかげ、岩のかげとあまり人目につかない所にあり、とうせなら、ちよつとつぶしてリテックの中へ……と心かげ水ば、いつ山を訪れても、美しく氣持よく楽しんでゐるのにと思いました。

せめて人の残したゴミを持ち帰らなくとも、自分の持つて行つたもの位はそのままと持ち帰る様に心がけたいものだと思ひます。よく山へ出掛るゝ肩カゴが目にとまります。あの肩カゴの肩も、いゝか誰かが下ろすのです、本当に山を愛するなら、自然の美しさをそのままにしておきたいものだと、山の自然について考えさせられた一日でした。



後立山 全山縦走。

竹中 26 30

木島忠彦 古木博明

今回の山行は装備重量を極力減らし山行を考え、食料はインスタント食品をフルに使用した。又シラフは持たず、シラフカバリのみの山行とし全装備重量を55kgとした。全体を振り廻り、まずシラフカバリのみでは奥くて夜がつかまかぬとれない、食料はインスタント食品で充たである事などがわかり有意義な楽しい山行であった。

7月26日 平岩の(10)へ蓮華温泉(10:40・10:45)へ蓮華温泉(11:15・11:20)へ天狗の庭(13:00・13:35)へ白馬大池(14:00)へ

一日中暑い暑いの日であった。

7月27日 白馬大池(15)へ三國峠(20)へ白馬頂上(8:10・8:35)へ白馬小屋(8:40・9:05)へ白馬遺ヶ岳(11:00・11:15)へ天狗山荘(11:40・12:30)へキレット(13:05・14:05)へ唐松頂上(16:30・16:35)へ唐松小屋(16:45)へ泊

白馬の大雪渓をアリの様に列を作つて登る。

てくる。すごい人である。唐松小屋の廻りのテント場は非常に悪い。キタナイ、場所が狭い)

7月28日 唐松小屋(30)と五重小屋(30)の間に五重小屋上(8)と新(5)とキレット小屋(1)35(12)と、鹿島槍原上(14)14(15)と冷池テント場(16)30泊)

キレット 通過は濃いガスがすかすかして何も見えず、又鹿島槍下山中、じつと強い雨に打たれテントの中は池のようである。着ているものは天フ又した。

7月29日 冷池テント場(6)20と冷池小屋(6)10(6)30と新(5)15(8)30と新(5)15(8)30と岩小屋沢岳(9)10(10)30と新(12)15(12)30とスバリ岳頂上(15)15(15)30と針、木小屋上(14)14(14)30と針、木小屋(14)50泊)

黒部湖を石手下に見ながら快適な一日であった。今日の夕焼は美しい。針、木小屋の穂見山荘内は非常にキレイでスツキリした。

7月30日 テント(3)50と蓮華岳頂上(4)20(10)30とテント(6)00(9)00と大沢小屋(10)30(11)00と(10)15(15)30)

蓮華岳の御来光は雲が多すぎて失敗であった。扇沢でアサギを買った。アイスクリームがうまくいった。(木小屋)

この計画は春から二人で考えていた、本当は蓮華岳を越えて七倉へおりの計画を作ったが針、木崎から七倉までのタイムがきびしかったので計画を打ち止め今回は扇沢におりることとし、次回に葛岳と船窪岳をやるのにした。白馬岳は今までには一回位入ったが、蓮華のコースからは入っていない。ましてマキレットなどはぜんぜん！

7月26日 くがきバスにゆられて細い道を行く、バスは満員、学校で白馬岳登山をやるのか駄も学生で混み合っていた。

何んにもない秘泉であり、蓮華温泉へと向う、歩き始めるとすぐ汗がふき出る。今日は特別にあつい株だ、山の上のすずしい風がほしい。蓮華温泉は大きな建物で温泉のにおいがする。ここも学校の生徒でイッパイだ、二人は小屋の前の芝の上で昼食にする。天気はあまり良くはない。蓮華温泉からはほとんど登る、汗がすごいザックがくらくらする、つらい時だ。一目目はつらい、とにややくものすくあついあつい、休みながら少し登る。天狗の庭で休む時はじめて山のすがすがしさを感じた。雲の中で廻りは何んにも見えない。大池までは一時間とちやちやと平坦な道をゆつくりと歩く、すこしバテぎみでも大池には2時間分に着く、時々、濃いガスが通り過ぎてゆく、まだそんなにテントははってなかった。一番いい場所を見つけてテントをはる準備をしていると小屋の人がきて場所を変えてく水という、ガスが水しだいへリコアターが上るといふ仕才がないから石米缶

はなれた所へテントをはり、や々と一晩過ごす。時間早いので池を散歩する(男三人では不審である)。写真をとっている人(リカ)が僕んで来た、テントがあげないと悪いもどると何んともなつた。へりさえさ3回とくるうち廻りのテントは風でペグがはずれ倒れされる見ているとおもしろい。テントの人達はあせって走り廻っている。紅茶をのんでいると何んか有名な写真家来てモデルにテントのことになってく水とたのまれる。そのうち山溪が密人に二人の写真のるぞなんて話しながらウドンを食べぬる、バテぎみ、あやすま、オーサー、サター、まろがバーだけではだめで、夜中に目がさめる。

7月27日 外は曇空、天気は最高今日は白馬まで唐松まで、登るにつれて白馬大池の形とまわりの山々が見えてくる。他パーテと同じ位のスピードで歩く早くもなくあそくもなく、大雪渓を登る人の列が見える。上から下まで切れ目が無い、たいしたもの。白馬の人数がどの位のものかわかるような気が

する。白馬の頂上は何回もきていたので写真をとってすぐおきる。頂上小屋にてジュースを買つ、200円なり、白馬ヤリは休まず登りきる。なるべくゆっくり歩き、なるべく休む回数とへらすように歩く、休む時は必ず何か口にする、そんな感じが今回の山行で得たものかも知れない。

天狗山荘前にはまだたくさん雪がのこっている、テントをはるにはいい場所のようだ、天狗山荘にて中食、ここから先はいよいよオーのナンカンギレントである、時間制限がありあまりおそくに出発できない。暗くなったら行動させないよう指導しているようである。カエラズはすごい早く歩くこともできず休むこともできず大変である、バランスをくずしたらま、さかさまおそらしい、時間がだいがかか、た、なかなか唐松につかない最後はもうやんな、た、石崎近くにはや、と唐松山荘についた。テント場は小屋から祖母谷の方へ少しおられた所、でもとてもおわりて行く気には存れない、

又、テントをはる場所もあるかどうかわからぬので小屋のそばには、た。木はテント場にあるぞつて、とてもおきる気がしないおりても上ってこれない(つかれて)小屋で水を買つ一と50円、ビンワリしてつか水も取、とぶ、銭々のそばにおそくきた新太のパーティガテントをはる、つか水たので早めにと、明日は鹿島までこえる。

今日のキレットでは足がいたか、た、いたいののは前からで上りは何んともないが下りびたいへん、最後までもってくればばいいかと思いつながらおとじた。

7月28日 今回の山行の中絶日、作日のキレットでつか水を。冷池のテント場まで行けばいいのだが先は長い、今日もキレットを一つ通過せねばならない足かも、かどうか心配である。天気も心配である、五竜の小屋に着いた時はもう五竜の頂は見えない、この正月に通、た道がこんな寒な所だ、たとは初めての冬山の北アルプスに入、て足がかるたことお思いだせる。五竜からの下りは苦労して

白馬・唐松・縦走記

田中 進

時 5月4日・8時30分・8時4分

参加者 田中 他8名

先月「こぶし」の大衆山行で登ったばかりの白馬岳を会社の同僚と再度登る事となった。混むのでは……そう案じた白馬駅であった。雨が降りた登山者は意外に少なかった。我々はタフニー2台に分乗、猿倉へ、さらに白馬尻へと足を運んだ。白馬尻で昼食後大雪渓へ、大雪渓 その魅力的な呼び名はうらはらの黒い肌と見える大雪渓は、歩きにくく、小生^はあまり好まない。大雪渓を過ぎた頃から曇っていた空がぐんぐん晴れてきた。咲き乱れるお花の色も光を受けて鮮やかさを増したかのようにある。今晚の泊りは白馬山荘の予定であったが、村営宿舍の前近来た時、アルバイトの学生らしきヒゲヅラのお兄さんが、「山荘は満員だがこゝはすいているとしきりに勧めるので我々は、

予定を変更、村営宿舍に入りますとした。しかし、こゝも満員の状態であった。季節柄仕方のない事であろう。しかし、彼が言った「これは親切で言っているのです」の言葉が気になったのであった。今日、うちに「頂上に登ってしまおう」という事で夕食後、全員で山頂に向かった。夕陽は途中で沈んでしまい薄暗くなつた山頂でリリーダーより意外な事を聞かされた。同行の岩崎氏が、山頂附近で三万円也を捨てたと言うではありませんか。大金であります。我々は協議の結果、小屋に届ける事にしました。ネコババも非常に魅力ある行為でした。神聖なる山ではとてもそんな事は出来ません。だけど岩崎氏も黙っていたれば仲間が相対い、気分になれたのに後悔しているかな？、いや、清廉潔白なる彼の事です、そんな事は数塵も思わぬに違ひありません。帰りは三万円をビールに換算したり、あがる程飲んでもまだ余るとか、そんな話ばかりが出たようです。4日は、4時に出発でした。今日は、雲一つない素晴らしい天気です。朝焼の妙高連

峰が美しく特に噴煙またなびかせた焼山が
 とても印象的でした。流れる汗も、吹き上
 げる涼しい風に吹き消されるかのようであ
 適な縦走路です。天狗山荘へ向う途中で我
 らは、非常に珍しい現象を体験する事が出
 来ました。それは霧に映つる自分の影の頭
 の部分に丁度、仏像の頭光の如く光の輪が
 出来る現象で、いわゆるブロッケン現象と
 言われてゐるものです。話には聞いていた
 のですが実際に体験するのは初めてであり
 非常に貴重な体験でした。これは昨日の三
 万州のせいかもしれせん。天狗山荘はゴ
 ミ一つない実に清潔感溢れる山荘でゴミを
 捨てるなというより捨て難い感じを受け、
 ゴミ対策に対して何かを暗示してゐるかの
 如く感じました。心配していた不帰の嶮の
 難所も同行の女性三人は難なく通り抜け、
 優しき山の乙女の片鱗も見せてくれました。
 唐松の山頂より前方に五竜のその雄大な裾
 の広がりを見たと時この山行はほゞ終つたよ
 うに思いました。

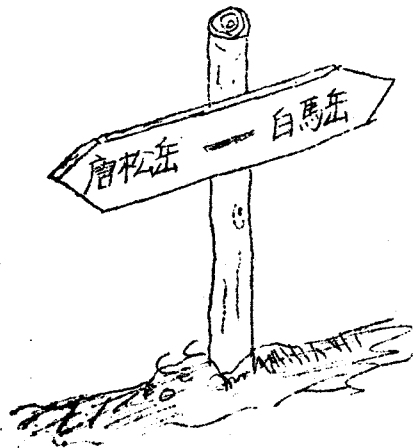
コースタイム

8/3

直江津(7:00)→白馬駅(10:40→10:45)→
 猿倉(10:50→11:00)→白馬尻(12:00→12:30)→
 葱平(14:20→14:45)→小雪菜(15:00→15:20)→
 お花畑(15:50→16:00)→村営宿舎(17:00)宿舎

8/4

村営宿舎(4:00)→鑓ヶ岳(6:00→6:20)→
 天狗山荘(7:00→7:15)→唐松岳(11:00→11:20)→
 唐松山荘(11:30→11:45)→八方池(13:50→14:00)→
 細野(15:35→16:00)→白馬駅(16:20→16:32)→
 直江津(18:40)



槍ヶ岳集中登山（岳沢く槍ヶ

表銀座コース）

メンバー 鈴木・木村・清水

オ一日目 8月13日 晴れ、松本から夕

クシーで上高地に昼近くに着く、すぐに飯を食う。上高地まで来てはまだすぐ暑い、飯を食ったらなんだが動くのがいやになり、ここで一泊するが？」と私は言ったが、二人は行こう／＼というのでした。たなく岳沢へ向って出発、12時30分、樹林の中をしばらく歩くと林からぬけ大陽の暑さとザックの重さでいやに苦しくなってきた、でも今日は時間短縮すれば今日リミニア地、岳沢に着くのでガンバル。

岳沢キャンプ地着15時10分、テントを張り、すぐ飯を食う。そしてトイレに行く、三人一度に入れないので順番を待つ、消灯、20時00分。

オ二日目 8月14日、五時起床、朝食の程度ゆめんどろで、ラーメンを作りパンをかじる。上高地がガスで見えない、しかし晴

れやうな天気である。テントをたてた6時00分、出発、岳沢から前穂への登りは急でなかなかきつい、しかし朝の空気は冷たくらい。8時10分、前穂の分枝点に着く、頂上を目指す目の前に見える、朝のラーメンが消化して早くも腹がへる、パンを出して水をとると二人若すずめがやめて来てパンのそば水をついていた。「おい、このすずめがまえて夕飯の焼高にするか？」といった位にすずめはまでよって来た。8時30分、前穂分枝点出発、急なガレ場を30分ほどで頂上に着いた。

「ソワール」一瞬ため息が出た、いま登って来た岳沢、上高地が手に取るように見える、北の方向には槍ヶ岳、表銀座、西に穂高高原が連綿と見える。また下には湖沢回地が見える「すずめ」テントのすぐそばで「頂上発」時10分、奥穂へ向う。奥穂で昼飯を食い、湖沢岳には15時45分に着く、ここからの下りはすずめがきつい、ザックが後へたってバランスをうしないやうになる。足がガク／＼でいやに時間ばかりかかると下りた、そしていよいよ今日のテント場、北穂

頂上が見えた。長尾山頂者、クモを抜く。外に出る、今夜の星はスプラシイ、星数も多し多いナリ。そんなことを言いながら二人ロトイシに行つた。

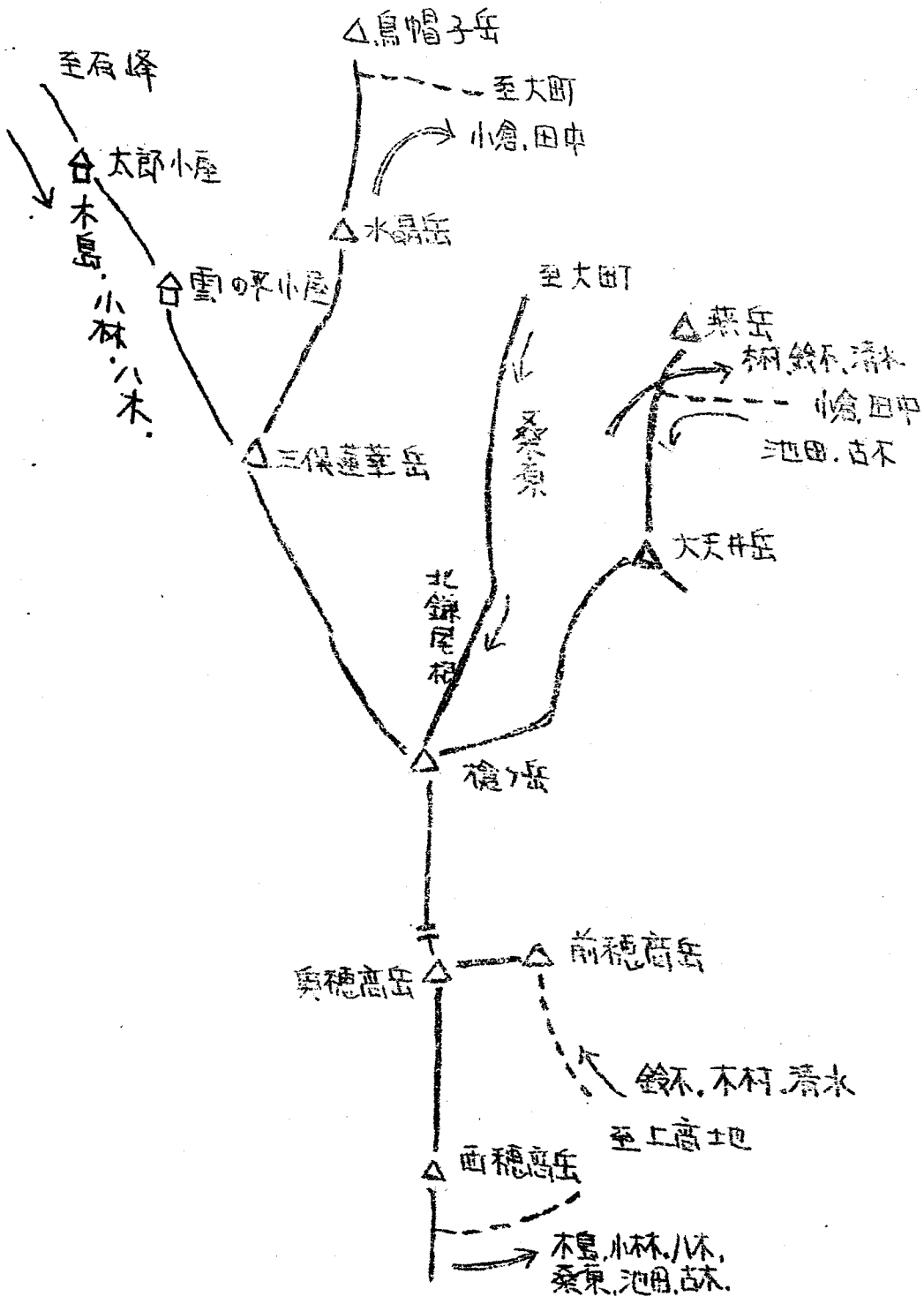
八月三日 八月五日、早朝日射焼ケスプラシイ、7時知分キレントの下リに入る。霧もふり通るとクライマ、カモ谷を登つてゐる。キレントの下リオチでは人がアリの有りようを、何んなくキレントものりこえ南岳に着くぞとむら槍が下々く見える。霧岳麓10時30分、途中からむら歩いたり雪を食つたり、昼寝をしたり、まるでじつニヤクた。8時30分槍の肩に着く、もう皆私達のテント地を確して出てもかえてくれなカニゲキルひでぞ。その日に皆で槍頂上を復、

八月四日、八月六日 今日も又天気がいい朝だ、槍に集中した各パーテイトも別れまた8時30分出発、今日から表銀座コースだ。朝早くも昼食用のパンを出した、小屋の人達の私達のパンを見てそのパン野菜

パンも本之屋食ふ所とすまじ。はうまじや10時30分出発、栄養高い飯のせいかほとんど心ツキも上りてとばす、13時30分早くも今日カレント地、大天井に着く。早々もマンと言つたのは四日目終る。

八月五日 八月七日 まもまた今日もいい天気だ、今日まで歩いた槍、穂コースが良く見える。7時40分出発、途中お花畑がすごくきれいだ。名前はサツパリ。またまたほとんどばす、早くも表頂上に着く、一時間ほど休み最後のテント場、中尾温泉に向つ。中尾温泉は10時50分着、テントをはり旅館の風呂は行く、風呂の中で熱の途中出合つたおじさんと又合つ。そのおじさんにじりもごちそうになる。旅館を出ると外は雨だ、瓦。何日ぶりだろうが、楽しかった徒走も終りに近づき最後のキャンプを楽しんだ。

清水、記



槍ヶ岳山集木中登山(白鎌尾根廻り)

バーティ 木島、八木、小林

初めての7日間に渡る縦走集中登山に、不安と、行きたい、という衝動にかられ、約25kgの荷物を諸共せず、勇んで出発!!

① 天気晴朗 結氷して折立から今日の目的地 薬師沃小屋へと脚を進める。森林の夕い急登で風通し悪く早くも汗ビツツリ、40分位で休みパンとリンゴを食べ再び歩く。苦悶の末、見晴しの良い草原に出て一休み。眼下に、有峰湖右に黄色の薬師岳が印象的。ゴロツと仰むけに空を見つめている間に10分位快眠に入る。なだらかな登り続くと、遠方のグリーンゾーンの中に映える赤屋根の太郎平小屋が見えた。鬼に角暑い。この暑さの中で木よりも甘酸っぱいリンゴのほろろか、どれほど我々の咽を潤してくれただか許り知れない。差入れ人よアリガトウ!! ハイ松の急な下りから薬師に出る。沃の音と前さながら単調な道を行く。やつとキャ

ンブ地に着くや小崩がバツつき、急いでテント設営夕食をとる。物ねる。

② 起床 快晴 白出発 黒部川の水は冷く快い。吊橋を渡り森林のある急登、昨日の崩の為か足下がぬかるみ歩きにくく、全くきつい。森林の緑色が、朝日に映えて一際美しく。苦しさを荒浄してくれる。やがて岩の夕い台地に出る。アラスカ、スイス庭園を経て、雲の平山荘に着き小休止。ここからの眺めは面的でエキゾチックで一段と素晴らしい。遙かに、独特の雄姿の槍ヶ岳山が目に入る。再びハイ松の中を通り祖父岳を捲いて日本庭園に出る。その途中の雪溪の水が突に冷く、イヤと言う程飲乾す。空の青、苔の緑、雪の白のコントラスト何と素晴らしいことか。急な下りを経て黒部森流を渡り三俣山荘に着く一息。頸筋が痛む程日照れが強く、お互に顔、手が相当焼け白い齒が妙に目につく。三俣連華岳を登り双六岳と向う。手前の山を双六岳と見間違え疲弊の度合を深めたが、一息入れて2日目のキャンプ地 双六小屋につく。

こゝで神岡管林署の古坂氏と出合ひ夕食迄
 の一辨、楽しい談笑に耽る。又、美化博達
 員草を頂きチョッピリ嬉しくなる。900床に
 入る。

9/5 305起床 夜床の星が、実に鮮明。ア
 ッ流れ星?りと大声……下界では何々見ら
 れない人工衛星である。寒さを忘れて暫し
 見とれる。535古坂氏にお礼の挨拶をして出
 発。今日は、仲間に見えるという嬉しさで
 何故かしら足がスムーズによく前に出る。
 しかし、橋ヶ岳が、目前に迫ってくるにつ
 れ、もうすぐという安堵と、強い日差しと
 重なって急に、荷が肩に食込み疲れを覺え
 息苦しい。1025待望の橋ヶ岳小屋に着く。
 直ちにテント場を4張確保し仲間を待たす。
 徒走路を振り返り長く歩いて来たものだと
 心の中は、荷足感にあふれていだ。次々と
 仲間が到着、盛大な夕食となつたことは言
 うまでもない。

ユースタイム

- 9/3 富山 525 有達口 602' 650' 折立 820' 840' 太郎平
- 9/4 小屋 325 1400 業師沢小屋 1600
- 9/4 業師沢小屋 650 雪の平山荘 910' 1020' 黒部源
- 流 120' 125' 125' 三俣山荘 1300' 1320' 三俣連華岳 1420
- 1490' 双六岳 1570' 双六小屋 1625
- 9/5 双六小屋 555 橋ヶ岳山荘 1035

9/4 はれ、久し振りに(?)長く眠り、山に入り四
 日目の朝を寝て迎えた。

9/5 起床、そして6に小倉組、清水組と別れ、
 々々人は穂高へ向う。あ、ちと眠の、こゝら
 と眠の、やはり朝のうちには快道です。ごもキ
 レットのあたりから恐ろしさが増わり、前道
 のみという感じですが、どうにか快道に近づくと
 と、とぞり立つ岩壁にいくつかのパーレーが
 取り付いており、今この良機でさへ恐怖を感
 じている私なのに、昼ごも陽の当たらぬ薄
 暗い岩壁で彼らは恐怖を感じないのか……
 とよす思ふに。

そして又一歩一歩登って行く。昨日のコー

スに此べ今日のコースでは驚く事ばかりで
 す。この山でのラッシュには本当に驚きま
 ー氏。改穂の頂上でも人、人と膝を下
 す所も覆す程です。でも自然は、私を想像
 以上に美しく迎えてくれました。すぐ手か
 とどきそうなる前穂の山々、とどむカラフル
 な洞沢のテント村、田、たり梅えくいる常
 念山脈、どこから見ても多らない程、とし
 るメルヘンの世界を思わせたく山に雲の平
 なと美しい景観は今日の緊張をやわらげこ
 れからの活力を与えてくれました。

30分休憩のうち今日のめぐりに向けて去る
 奥穂のテント場もすどにいっげい、どうに
 かこうにかこの張分確保して安心、その前か
 ら翌日のコースが行けるかどうか不安にな
 り、何か下山する方法はかと考へるけど見
 つからない、明日の天気次第とあきらめの
 就寝。

朝、すばらしい夜明け、残念ながら西穂行
 きが決定、瞬間に死にたくないと叫び
 成る様に成れ、と、度胸をすててお発、下
 イフリワジに始まり、ジャンダルム、向岳

西穂と、想像以上に厳しい所であり、本当に緊
 張の連続、それだけに西穂に着いた時の感
 度はひとみで、何か急に木ととして
 気が抜けた様な感じで小尾まで歩き始まる
 途中雨と雷様の激しい雨で、足早に下山、この
 日の夕食は食料不足の為首し懐かしのスイ
 トの夕食を食した。食後、もうろろの底
 へ、とうとう山行も最終日、昨日の雨もす
 かり上成り、縁がけ、とうとう美しく映えど
 の中を上高地へ下山しました。

いつもの山行でもそうですが、岩と岩と
 の間に咲く花には勇氣すけられ、私も心死
 ぐまきっているのよと聞えた様に思えました。

- コースタイム
- | | | | | |
|-----|------------|-----------|-----------|---|
| 6% | 総テニト場 600 | 中岳 635 | 南岳 709 | 北 |
| 7% | 穂頂上 1120 | 洞沢頂上 1507 | 奥穂小屋 1530 | |
| 8% | 奥穂テニト場 530 | 奥穂頂上 620 | シヤ | |
| 9% | ジャンダルム 880 | 天狗コル 930 | 向岳 1120 | |
| 10% | 西穂 1130 | | | |
| 11% | 西穂小屋 720 | 上高地 725 | | |
| 12% | メンバー | 不島、桑原、小林 | | |
| 13% | | 石不、池田、八不 | | |

行望の北アルプス徒走

池田 洋子

池田 登り、ヒバクしに策り桑原氏と一
 語になる。松本の駅で飯取を取ったのが
 かの不群にあり眠れず困ったのでした。
 月明の駅よりタクニで中房温泉へ向いまし
 た。朝食をとり、近くにあるリュックを背
 み、く歩く。さすか表銀座だけあり、登山道
 は整備され、つまずき、久し振りの徒走分の
 ぞ育中の重みが勝にすぎ、登れるのあやぶま
 れたのです。私のペースで歩かせてもらい
 どうか合戦小屋まで来た。ガスの切間か
 ら見える窓は目とまはるばかりです。こん
 なにきれいな雪の様に真白い山は本当にあ
 るのかしら、夢でも見ている様な気がし
 ました。燕山荘から大天井の洞には高山植物を
 代表するコマクサの花が咲いています。こ
 んなに沢山のコマクサを見たいのでも、こ
 した。多分過ぎの夜産の星ゴミの様に空一
 面輝やいてる星、山ごしが見れない星。
 池田 登り、朝食の準備でテントの外に出

るとまだ星が見える。南の空にはオリオン座
 も光っている。空を見上げていると星が動い
 ていきます。流氷星ではありませんが、人工衛星な
 のです。生まれ初めに見たのです。ユツモ
 大天井からの御来光も忘れられない事の一つ
 です。ふつと私は今どこに居るだろうかと思わ
 せるような一面の雲海。そそり立つ磐岳、今
 日はあそこまで行くんだとライトが湧いて来
 ます。越したり、越されたりと、御見知りにな
 った人からみかんの玉話と一口差し入れもら
 ったり、なび、なびに逢えるのを
 楽しみに肩の小尾へ向う。もう木島、小林ハ
 不氏達はだいたい前に着いて、テントが設置して
 あり、持ちきれずに礮の頂上を踏みに行ったよ
 うだ。私も前穂から来た清水氏達と礮の頂上
 を踏む。ここがいま迄煙がわいていいた礮なのだ。
 頂上もラッパで記念撮影をして、テニ
 ト湯へ戻る。その夜は昏ながら再会を喜びあい、
 明日の為に早めに眠りにつく。

コース
 池田 登り、朝食の準備でテントの外に出
 池田 登り、朝食の準備でテントの外に出
 池田 登り、朝食の準備でテントの外に出

山 登立 中 集 丘 松

倉鹿山の会を初めての集中登山。
三バードと単独一人、計十一人で行
り六月十五日全員無事に松の脊へ集
会をした。

表銀座と裏銀座縦走

期日：・S 49.13 S 8.18

メンバー：小倉泰治・田中 經

○大糸線有明駅下車、すぐにタクシーを
中房温泉へ走らせる。売店前で腹ごしらえ
をして出発。登山路は合戦沢に沿って急登
の道を行く。約三十分程でホーベンチ木場
に着く。ここで木筒に木を補給して再び急
な登りが続く。他の人も追いつけたり遅り
抜かれたりしながらホーベンチに着く。

古木・池田組はやりに調子が良い、倉鹿
はもうバテ気味なのだ。

合戦尾根に到着すると、もう古木・池田組
は出発の用意をしてきた。合戦の頭に出る
と道の両脇に高山植物が咲き、ゆくりと
写真を撮りながら燕山荘へ着く。
古木・池田組は燕山へ行、たらしり、田中

君が後を追うようにして燕山へ行くが、小生
はバテてしまりに、で少し体を休め履物など
直す。

為石街門吊岩の少し手前で長野登山のパー
スが表銀座コースと裏銀座コースに別れて入
山をしてりる事がわかった。

切通岩を下り、カラ場を登り分岐点に出ると
右は大天井ヒ、テへ、左は常念方面だ。

倉鹿は左の道へトラバース復味の登り。今
日は最後の登り、バテているがなんとか大天
井のテント場に到着、すでに古木・池田組は
テントを張り夕食の用意をしていた。

夕食後は四人で酒を飲み、今日の出来事を
語り、今日は本当にバテた。明日の夕方今夜は
早く寝る事にした。

コースタイム

- 高田(04:00) ~ 長野(07:30)
- 松本(08:30) ~ 有明(12:15)
- ホーベンチ(13:15) ~ ホーベンチ(15:10)
- 合戦小屋(17:45) ~ 燕山荘(19:20)
- 大天井(19:40)
- 中房温泉(5:00)

86 朝三時に起きテントの中からは望を見

上げる望がキラキラ光っていた。

今日も晴天だ。朝食をすませ、カメラを特

って御来光を撮ろうと太陽が上るのを見つ

つ、と太陽が上るとおち、こちを注

ッターの音がする。

写真を撮り終ってテントを回収する。古

木地田組は今日も朝子が良さそうである。

俺達よりも早く出発した。その後に俺達も

行く。足もとに見える大天井ヒツテを見て

一気に下る。ここからはお手り上下なり道

なのでペー人が上る。終線に出ると槍ヶ岳

と見ながら行くので気持が良さ。

ヒツテ面系に着くと槍が近くに見える。

ヒツテ面系から急な道を下り終ると水俣衆

越えて、で少し早いが昼食にした。ゆっくり

と休み、こんどは東嶺尾根の登り。槍はも

う目の前だ。

ヒツテ大倉、こちで水を補給して槍をゆ

さして最後の登り、なんか急に元気が出て

きた。槍ヶ岳山荘前で桑原さんと小林さん

に出合ひ槍の肩に到着する。

ヒツテみんなが集まっていた。俺達が最後であ

った。ひと休みして槍へ登りに行く。明日は

又バラバラになる、俺達は裏銀座へ行くのだ。

コースタイム

87 大天井(6:30) 大天井ヒツテ(7:30)

ヒツテ面系(8:30) 水俣衆越(9:30)

ヒツテ大倉(10:30) 槍ヶ岳山荘(11:30)

記、小倉

88 昨日、あたり一面を覆っていたガスモウ

ソのように消え去って山々の山々が手に取る

ようにハッキリと見る事が出来ました。

リフの日が登ってまた、そう思っていた槍

ヶ岳でしたがそれが案外早く現奥のものとな

り、さらにはこうした素晴らしい光景を目の当

りにして本当に運が良かったと思われました。

たもその現奥の裏には念に入っていた水はこ

そと、というだけだがあるのです片と……。

朝は山が一番美しく見える時ではうか、朝

の光を受けて薄暗い山層が明るく輝き出す様

に何とも形容し難い神聖なそのを感じます。

この美しく神聖なる光景を見る事が又登山者の一つの報酬なのかもしれませぬ。

記念撮影の後、小生と小倉さんはこ水から登る裏銀の小マを前方に見ながら槍のガレ道を下りました。

裏銀は起伏がゆるやかでお花畑とハイマシが多く、のどかで登山というよりは山歩きを楽しむと、たぬじのコースです。

双六小屋にてラーメニの昼食、双六岳は登る気持は十二分にあつたのですが、道を間違えてトラバースする形になつてしまひました。

三俣連峰は小倉さんの体調悪く小生一人で登つたのですが、頂上はガスで視界が全くみえず、すぐに下りてきてしまひました。眺望がさかなりというのは残念な事ですが、今の自分に必要なのは登つたという事感なので、それでも結構満足なのです。

三俣のテント場は木も豊富で環境はいいですが、とうもろこみの処理がよくないように思いました。登山者のマナーもある

で、うけと、テント料一人百五十円也を取るのでしては管理が出来てりなく、せつかくの周りの環境が生きてりないという感じでした。

コースタイム

槍の肩 (6:20) 根沢岳 (6:50) 双六小屋 (10:45) (12:30)

三俣連峰 (5:30) 三俣山荘 (6:30)

三俣のテント場は雪梁の下にあるせ

りでほうか、朝は寒いわでした。見事なばかりのハイマシ帯の中をワシバ岳に向けて出発。

ワシバ岳はカレの結構急な登りですが、その頂上に立つた時そこに展開する三百六十度の大パノラマはさすがが北アルプス、と思わせるものがありました。

ワシバから木晶への道は足下に広がる雲上の乗園、雲の平が幾々の目を驚かしさせてくれました。雲の平を評して木晶さんきわく、二人で行く所である、のき葉を思ひ出し来年も再来年もあるコースを避けてトボ／＼と山を登る自分の姿が思ひ浮かんできました。

黒い山頂の水晶岳は縦走路から外れている為小屋の近くに荷物を置いて往復したのです

が山原より望む黒部湖は霞の爲その暮り湖
面を僅かに見せただけでした。

野口五郎岳を過ぎた頃から雨がポソリく
当、てきたのですがそのうちに雨も雷を伴
、た本格的なものとなり、雨更を体は蒸れ
始め交わすき葉も次第に少なくななり、ただ
早く小屋に着く事を願って黙々と歩くのみ
でした。

天気の良い日はカメラを向けて走りかけ
る雉鳥の親子連れにも目もく水ず、大阪の
山岳会の人達と抜きつ抜か水つのシーソー
ゲームを繰り返した後、や々と鳥帽子小屋
に着いた時はさすがにホッとしたものを感
じました。

冷えた体をウスキーで暖めた後、夕食の
用意で炊事場に行、たところそこでは非常
に多量な男性と女性が声高に話してしまし
た。聞くとはなしに耳に入る会話の中で先
生だという女性が話していた夏休みのうち
二十日山に入、てけるとか、アラスカ
に日賦で行、てきたしかの話にやささかビ

ツクリさせられると同様にその行動力に対し
うらやましさを感じた次第です。

雨は夕方より、厚い雲を奏、未に架めて夕
陽が赤牛岳の横に沈んだのですがその息を飽
む程の美しさに、自分にと、ては初めての苦
しく又乗しが、たこの長期山行の最後を飾る
に小さくしりドラマチックなものを感じまし
た。

コースタイム

弥三ツ使山荘 (6:10)

水晶岳 (7:30)

野口五郎岳 (8:30)

鳥帽子小屋 (6:30)

残りでしたがりす水糧会をみて、さう思いつ
つ小屋を後にしました。湖小屋迄のこのコー
スは視界のさかなり奥に単純なコースで小生
ならばこのコースをエリに使うのは、とた
めらう所ですがそこを湖小屋附近で女性のそ
れも美上単独行に会いました。弱き小生など
遠く及びぬ女性登山者の数多し事を新ため
て認識させられた次第です。

高瀬川は現在大ダム建設工事が進んでおり工事現場では巨大なダンプが走り回っておりました。数年の後には我がマの歩いたあの道も湖の下に沈んでしまふのかも少し水せん。人間の英知が湖という到の美しいものを作り出す訳ですが人間の作った美しさは自然が織り成す美しさには遠く及ばななり。山行と積むる度にその感も強くなるようになりました。

コースタイム

浴島帽子小屋 (b.20)

沼小屋 (b.20)

葛温泉 (b.20)

大町 (b.20)

松本 (b.20)

長野 (b.20)

高田 (b.20)

記 田中

不思議な経験

松岡 健一

昨年5月の末ほんの1週間目の自らの油断とミスでこの人主初よ、以来の最悪の年となり、た。せ、かくの我々の会が教

97年の山行には参加が出来ず、又ここ当分の間残念にもそれが望めどうに無いことを確信している。この入院治療ハ7月同会の昏々様には、いろいろ初世話初世感をお科けし心から感謝する次第です。一般社会から断絶された病院の中での生活は何と不思議な世界だ、アもうと今感じるので。悩み不安苦痛とここに居るすべの人人々は何か一つのしを心に肉体の中に持、こいるのですし、かしの表情には誰にも感じさせないものがある。患者同志なら目かうその集団に入り込みどうしても見分けることが出来ない。外部から来た人に自分の立場と状況を示しくくれると初めて確認出来る。病院内に悪者という一箇の社会集団がどうまーまうのかとも思。退院する頃になると一般社会へ出られる喜びと不安が何となくイヤな気持ちになる。病院という環境が身に付いて外へ出るの覚悟となるからと云、まいつ返も届られるものでもない。早く此から脱出せねばというあせりもある。だからこの期間に誰にも不思議な社会体験をしたのです。

全国登山祭典に参加して

不鳥 忠彦

9月21日〜22日に渡り全国登山祭典が
立山、剣で行われ、当会からは7名の参加
であった。他の男女との交流公算、肩負義
な祭典であったが、その甲斐に印象に残
ったところの部分を抜いて報告とする。

(1) 食料が悪い。

乗物の乗継ぎを順調に終り、皇堂に着く
当然の事のように、美女平からはバスの
荷物券を買わされ、荷物と我々高野動物人
間(?)とは別々に積み込み、降ろされる。
ところどころとところがある、高野動物の

下車していかないはないが、我々が今山行
の最大の楽しみにしていく材料がモツシリ
詰、たツツカ...

バス会社の話、我々の手違いで荷物は又バス
に乗って美女平に降りていってしまつた。
との事だ、さてどうしよう、バス会社との

せりとりがある。

会社側では今日は買ってきた、来たバス
が最終バスなので、もう車に乗れない、ゆえに
荷物は明朝となる。であるから我慢してくれ
との事だ、どんでもない、食料がなくてどう
して今晚を過ごすのだ...

会社側は方がない、当ターミナルホテルに部
屋を取るのぞ、今晚は3人で泊ってゆくことと
う。

そこで小生考える、悪い話してはない。ホ
テルなどどこ何早末と泊った事がない。テニ
トの中ばかりでそれがホテルに泊れる、それ
も女性2人とだ...。心の中でニンマリ。何
かい事があるのでは(？)と、悪い虫が起す
くる、それにテニトの中よりは...。迷う
決断の時だ...

「ハシ」は、生れついでこのバカ真面目が
邪魔をする。いや、このホテルへ泊まるの
は困る、我々はそれでも良いが、雲鳥沢には
腹をすかせたので、西我々の来るのを待つ
ている、我々が今晚行かねば玉子のなく、人

間に悪土を悪くすれば食べようかも知れない。……何んとかエサを上げてくれ。

バス会社の責任ではないか。」と云う。

公社側はどれほどだ。フマがあげられ、一たらい一六串と云う串で、グッフを上げるべく手配をする。

待つ事約一時間。外を見る。真暗だ。と伺うから一台のジープがのぼってくる。

や、と自分のグッフと再会だ……。自分のグッフに逢えてこんなうれしい事はない。聞く所によると有料道路料金がこの荷物を上げるのに五万円かか、たさうだ。高い!! この値段を聞いてよあカンベンしてやれと云う気持ちにや、となる。

18時15分よあお登。

(2) 酒

いつも山行には酒はつちものと思、みる看がほとんどである。今回も多分に減り、アルコールが豊である。

一晩目ウマが二匹で、差し入れのウイスキー一本をペロリとたいらげ、不満そうに

顔である。いつもいつも解っているつもりだが、ぶ、たまげます。

ところがである。次の晩の串である。途中より加わったドラが二匹の計四匹で飲むわ、飲むわ……。ウイスキー一本をペロリとたいらげ平気である……。

回りでも祭典と云う串なのが夜は晴項になつても下界の祭のようだ……。

ところが女性住人は、4匹のウイスキー漬の動物に不気味さを感じ、早々にテントを退参する。

(3) 初秋の雪

22日の朝も時お登の手前、ところが5時頃より雪降りである。直住153mもある入道なやつが……。

小生9月に雪にお逢うのは初めてである。

前夜のフアイトもどこへやら、今日は沈没と、ウトウト始める看も居る。

7時お登を決意、不満そうに顔もある。

外へおこみる、ゴックリ、雄山、入道、真砂、白い雪で溝すら化粧している。

美しく、別世界である。昏んばもこの景
観を見れば、もう沈んだ気持も吹っこんで
、主めがしく美トしく化粧した恋人に逢い
に行く時のあの軽い足取りで歩き去ってい
る。

(4) 恐怖

剣山の upper は人の列である。2時間も待
たされたや、と頂上。

さあ遅くなった下山だ。ーがし下りも人
の列でガニの横ばいで下りの順番待ちだ。
その時である、予想をしない恐怖が襲っ
てきたのは、小生の石背中に入ってきたッ
フと圧力がかかる、回りの人のウオー、キ
ャーとさう悲鳴とさうめきとも思へるぞけ
びがした。瞬間大きな危険が自分に襲いか
か、てきている事に気が付く、相当大きな物
体が小生の背によりかかっている、秀える
、どうしよう、くい止められないか！この
まま落下すれば下の人が危い、しかしこの
背に受けた大きな圧力、とくもささえま
れない、これで自分の一生も終りかと一瞬思

う。もうささえきれない、よし逃げよう。
石肩の圧力だ、左へ逃げるべきだ、逃げた方
向へ石が落ちない事を願う。

この瞬間は数秒にも思えたが、実際は一秒
位いで死つたのかも知れない。とにかく左へ
逃げる。大きな音を立てて石が倒れまわりぬけ
、落ちるゆく大きい石だ、人々や二人ではと
ても動じかす事が出来ぬほど大きいヤツだ。

一瞬落石の音を出さうにも声が出ない。とこ

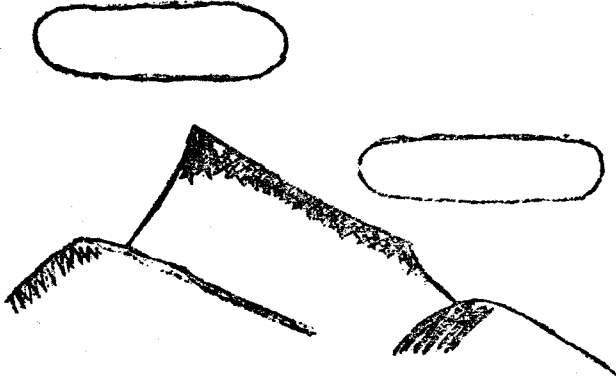
ろが我々山の会でも、美声をはこるKJさんが
、すんだ大きな声で、落石、落石……と数
回叫ぶ。落石の音は剣の山々に響き渡り、地
ひびきかする、恐ろしい。下に人が居たら、
まず助からない。回りの人々は青い顔、すく
みこむ人、震えている人、さまたげまだ、みぞ
るみぞる下をのぞくと、落石が地の底石をも
巻込んで、大音響を立てて落ちるゆく。恐ろ
しい悪夢だ。タメ息をつき、地に返る。足が
震えている。

下の人々は、丈夫と解かり全身の力が抜ける
ようだ。小生は石手、肩背少々のキズで済

む。

山に入り遊歩同とはあるが、今までこんな恐怖はなかつたのではなからうかと思ふ、今弄えても恐ろしい。

それにしても、上りの人が少人数で、よかつた、これが列を成つて上つて居る之時間前であつたらう……、地獄の縮図だ。



妙高清掃登山

島田五郎

10月6日、秋日和の中を妙高の清掃登山と行い約トラック之台分のゴミを片付けることが出来た。妙高の清掃登山は、今年之回目である。

又一回目は新浮巣山のゴミ会議主催で7月21日行なわれた。これには自然を斉る新浮巣民連絡会議の加盟団体である「ぶし山の会」も呼びかけがあつて、4名参加した。

その後の細会にその時の状況が報告されて、一回ぐらゐの清掃では、とてむゴミは片付けられない、かなりの人数は参加したが、地元から参加したのは役場の観光課関係の人が若干と、私達「ぶし山の会」からの4名でこの地域の山岳会からは参加者なしという内容で、その報告を受けた秋にはこの会が地元地域の山岳関係者に呼びかけてやろう、ということになった。

しかし最終的には、当日参加したのは、
「ぶし山の会」から数名、その他個人的に参
加して来た3、4名と新浮泉山のゴミ会議
から5名の約20名だった。

熱温泉の登山口に八時三十分集合九時にそ
れぞれの分担地域を決め、妙高を原牧場
に用急させたポリ袋200枚と、云々ぶし機
ノ台を荷つて去れ、去れ前はいくらゴミが
有ると云つても7月の下旬に行い、それが
ラ2ヶ月半、用意したポリ袋の半分もいら
ないだろうと思つていたが、有ること、有
ること、見る見るポリ袋にいっぱい、特に
一番休む所である天狗堂周辺と、山頂のよ
ごれは、ひどいものだった。

天狗堂周辺だけで100箇以上で、トラ
ック1台分、約90箇を、入谷ヒュッテ近く
までおろす。

山頂は、穴を掘つて約50箇分を工中に埋
め、残りを荷つて下り、途中のゴミと、天
狗堂周辺の残りを手分けして、背負い、熱
の登山口には約60箇運ぶ、以上約トラック

2台分を処理した。

今回は熱から山頂までというコースだけで、
これだけのゴミが有つたわけだ。

妙高の登山口は、一つだけではない。他の
コースもずいぶんゴミで埋もれていることだ
ろう。

それと7月21日に行つた時、天狗堂に集め
られたゴミが、全部ではないが、大半が周辺
の敷に不リ袋に入れられたまっ捨てる有
つたことが今回の清掃登山でわかり、下山後
関係者に当時の処理の状況を手く、その話で
は、アルバイトを使つてポリ袋30箇ばかり入
込へおろしたと云う報告でした。つくづく後
場の無責任に、いまだうりを感じた。

次にいくつかが有る山岳会にもっと働きかけ
る、自然保護の立場で行動が共に出来るよう
にしよう。今回は妙高を始めて独自に、清掃
登山したが、今後はもっと他の地域にもお出
かけ、地元と協力してやらなければならぬ
ことを、今回の行動から心より痛感した。

+++新会員の自己紹介コーナー+++

上野光枝

「おはいわせまで店員をしております。」

私をこの会に紹介してくれたのは、池内さんです。以前、「ごぶし山の会のこと」を聞いた時、ほんとは山好きな人ばかりと聞いて私も仲間に入りたく、紹介して頂きました。

でも、初めて月例会に出た時には、みんないくらか年上の人ばかりで、私も経験豊富な方ばかりで圧倒されました。

私は心細くなりました。みんなについていけるかしら...と。でも、考えようによって、良い事かもしれせん。

どうか、この登山の経験は二、三度しかない私をよろしくお願ひします。また、山へ行つてバテた時には助けて下さり。

佐藤正行

「山の会」という名前を聞いただけで、恐れをなす人が居ますが、一年前の私もその一人だった様です。ガールンを使用しての登山

りや危険の多い冬山などから遠慮される。事故や遭難の暗いイメージからどと思ひます。

そんな私が、白馬登山に参加させてもらって以来、会員の皆様の和気ありくの雰囲気、入会の用意に到った次第です。

私も幼い頃から野山を遊んで育った為か、野山を歩く事は好きです。日頃運動の不足してゐる私には体力低下の防止手段にもなりますので...

依り山をも、山頂に立った時の壮快さは、何とも言えません。私は時間的に長期の山行は無理ですが、身近な山から安全な、そして楽しい山登りに参加して、少しずつでも技術を覚えて行きたりと思つてゐます。

会員の皆様には迷惑を、おかけする事になるかと思ひますが、何れもよろしくお願ひします。



編集後記

今迄は出来上った「こぶし」を手に
していた訳ですが、今度、初め
て編集という仕事にたずさわ
てみました。

予定より大幅に遅れるのでは！
と思、たのですが、みなさんの
協力により、そう遅れる事もなく、み
なさんの手に渡す事が出来ました事を
まず第一に感謝したいと思ひます。

会では月2回の例会を、開けている
訳ですが、勤務その他の都合で出席出
来ない会員も多く、例会の席上聞かれ
る、意義のある話で、その時だけの話
として忘れ去られてしまう事も多いの
ではないかと思ひます。

「こぶし」は山行記録にとじまらず、そう
い、た面でも大いに利用して頂きたく
思ひます。



こぶし 第5号

1975年3月10日発行
編集 上越こぶし山の会
編集責任者 田中 進

発行所 上越こぶし山の会
913 新潟県上越市東木町501938
TEL 0255(24)3987 (杉本カ)